

ばんねんなみと

万年浪人（※人名）は、その席に座った時点で運命が決まっていたのかもしれない。

浪人はセンター試験のプロだった。センター試験が始まって以来、毎年受験してきた（結果に関してはお察しの通り）。センター試験の全てを知っていると云っていい存在だった。

毎年この時期になると、新米たち^{ルキ}がやって来る。浪人は彼らを観察していた（カンニングで強制退場）。そして気づいたことがある——センター試験で良い点を取れる者には、ある共通点があることを。すなわち……。

（なんだ……？ あの女、ここでカーニヴァルでもおっぱじめる気か!）

浪人は目を疑った。今、入室してきた少女、ほとんど何も身に着けていない！ ただの露出狂だ！

美しい裸身を衆人環視のもと晒しながら、少女は言った。

「わたしは赤井ソラ。あなたは？」

「ば……万年浪人です」

試験前に自己紹介されるなど、はじめての経験だった。

——赤井ソラ、恐るべし！

かの有名な戦術家は言った——曰く、闘争において先手を取ることは、勝利には必要不可欠であると！ 赤井ソラは、万年浪人のみならず、教室内全員の男子の視線をものぎ取っていた。彼らの集中力は、ソラ登場以前よりも恐ろしく落ちてしまったに違いない。まず初戦は彼女の圧勝と言えよう。

「……ねえ浪人。あなた、志望校はどこ？」

初対面の少女に志望校を質問されること自体が異常ではあったが、目の前の状況はさらに常軌を逸していた——裸の美少女！ 普段の宅浪生活ではまず関われないレベルの、それこそ天使のような少女があられもない姿をさらけ出している。桃源郷のような光景に浪人の脳はすでに蕩かされてしまっていた。

「東大です」

「……偶然ね。わたしもなの！ 仲、く、し、ま、し、よ、う、ね！」

ソラは満面の笑みを浮かべ、握手を求めてきた。熱にかされたように、浪人は言われるまま手を差し出した。

ぐい、と引っ張られる。耳元にささやかれる。

「——絶対、死なす」

一日目★一時間目【地歴公民】九時半〜十一時四十分
(なんだったんだ、さっきの宣言は……)

試験開始後も、浪人は問題に取り組むことができず、しばらく呆けたように考えつづけていた。

『――絶対、死なず』

聞き間違いだったかもしれない。むしろそうであってほしい。あんな美しい少女が、初対面の自分にいきなり物騒な発言をするはずがない。……してほしくない。

——ドスウツ!

(!?)

見ると、右手の甲にシャーペンの芯が深々と突き刺さっていた。途端に血が噴出する。

「あ、あああああああああーッ!」

浪人は痛みあまり席から飛び上がり、床をのたうちまわった。

「い、いだいいいいいいいいいいッ!」

「ふふっ……」

ほとんどの受験生が浪人を無視して、目の前の問題を解くことに集中していたが(正直心底うぜえと思っていた)

ただ一人、彼の苦痛を嘲った者がある。

「ククク……肉め……センター試験はすでに始まっている……」

他にもない、赤井ソラその人だった。浪人の方をけつして見ることなく、浪人一人に聞こえるだけのわずかな声量で、唇を全く動かすことなく笑っている。

「その芯には特製の毒が塗りこんである……もしおまえが偏差値六十五以下の汚物ならば、一瞬にして死ぬ毒が……」

(偏差値六十五だ!?)

浪人は思わず叫びかけた。

「そうよ、偏差値六十五でやっとセンター試験を受ける資格がある人間と言えるの。以下なら、死んだ方がマシよねえ?」

ニヤニヤ笑う赤井ソラに対し浪人は、

「馬鹿にするなよ、赤井ソラ。俺はプロ浪人生だ。センター試験開始時から毎年毎年受験をつづけているんだからな! 偏差値は余裕で六十五以上……」

「それ以上騒ぐと試験妨害で退室にしますよ」

……浪人は無言で問題を解き始めた。

二時間目の国語までは休憩時間がある。普通の受験生はここで昼ごはんを食べたり、最後の見直しをしたり、ゲームに興じて他の受験生の動揺を誘うという無意味な挑発を行ったりするのだが、浪人の場合は違った。

「赤井ソラ！」

その名を叫んだ瞬間、天使のような悪魔が振り向いた。

「なあに？ 浪人」

……やはりすさまじい美少女だ。芸能人でもここまでのレベルはなかなか居ないのではないか。そんな少女にニコニコと微笑みかけられては、思わず勘違いしかけてしまう。「んん？ テストはできたかな？ わたしはバツチリだったよ☆」

声も、アニメのキャラクターのようでかわいい。

「あ……じゃなくて！ 赤井ソラ！ お前、どういうつもりだ!? なぜか俺が注意されたが、赤井ソラ、お前のせいだぞ、どう償って——」

「チツ死ななかつたか」

途端に悪魔は本性を現した。

「残念ねえ。さっきの芯だったらわりと楽に死ねたのに」

「まさか……まだ……」

赤井ソラはうつすらと微笑みを浮かべ、文庫本を取り出してみせた。

「手なら他に……まだあるわ」

なぜか強烈に嫌な予感がする。

浪人は思わずすさまじい勢いでソラと距離を取っていた。「うふふ、逃げなくなつたっていいじゃない。おまえはわたしの隣の席。試験が開始されれば、どのみちわたしの近くに戻らないといけないのよ？」

畜生……。浪人は心の中でありとあらゆる罵詈雑言を彼女にぶつけたが、打開策を思いつくことはなく、休憩時間は静かに終了した。

★二時間目【国語】十三時～十四時

国語は浪人の得意教科であった。どんな模試でも上位に名を連ねていたし、だいたい八割以上の点数をキープしていた——その浪人が……恐怖している。

(なんてことだ……なんてことだ……)

センター試験国語は、評論・小説・古典・漢文という四

項目で構成されている。自分の得意な領域から解き始めるのが定石だ。浪人の場合、小説がもつとも得意であったので、そこから解こうとしていた。

第二問…次の文章はとあるJKの作文から抜粋したものである。これを読んで、後の問い（問1〜6）に答えよ。

あたしミカ。モテカワビツチJK♪ 今日わ、ズツ友のサオリといっしょにメンズハンティングいくしかないよね、とか（中略）——サオリは死んだ。人類がより高次の存在となるには、それしかなかった。世界に対する私の良心と責任の所在は明らかになったと思われる。永久機関の設計……彼らは私よりも正しかった。しかし、全てが遅かった。（百五十八字）

問1 傍線部の「彼ら」とは誰のことを示しているか。

（やべえよ……やべえよ……何も読み取れねえ………ていうか三行目で知能が脈絡もなく爆上げしてるぞ……!?)

一問目からしてこの難易度である。あとはお察しの通りだ。

（そういえば。今年から新指導要領に移行したとか聞いたな……）

指導要領が移行したということは、それに伴ってセンター試験の範囲も変更されたということだ。いかに浪人がセンター試験のプロと言えど、範囲が改定されてしまったら、手も足もでなかった（※浪人は超情報弱者だったために、受験生なら当然に頭に入れておくべき重要事項を直前に知っている。この情報に対して鈍感な点からして浪人不可避である）。

（!?)
異様な地響きが伝わってくる。地震だろうか。

違う——赤井ソラだ。赤井ソラがすさまじい勢いで問題を解いているのだ。

「あ……あああああ」
マークシートを塗りつぶす摩擦によって、試験用紙から炎が立ち上っている。ドドドドドド……彼女の背後に、青白いオーラが見える。

「!?」

次の瞬間、なんと、問題用紙から炎が立ち上っていた。どう考えても解答不能状態。赤井ソラは戦国武将のような声（こちらが地声の可能性が高い）で叫んだ。

「クソッ！ 読めんわ！」

（ざまあああああああああああああああああああ）

浪人はほくそ笑んでいた。ざまあみろ！ 天罰が下ったんだ！ ……そんなことを考えても、彼の点数が上昇するというようなことはないのだが…ともかく彼は心の底から彼女を嘲笑していた。

（ざまあああああああああ！ ざまあああああ…?!）

——ない。試験問題が、ない。

目の前にあつたはずの試験問題が、一瞬にして消失していた。

（ど、どこに…どこに消えた!?）

（ここよ、万年浪人）

——こいつ、脳内に直接…!?

驚いている時間はない。試験監督の動きに細心の注意を払いながら、浪人は声の方向を見た。

赤井ソラの問題用紙はすでに炎上していなかった。この短時間でどうやって鎮火させたのだろう…いやあれは！

（お、俺の）

浪人の問題用紙だった。

（いつのまに…いつのまに奪われた!?）

浪人は完全にパニックを起こしていた。だが、問題用紙を取られたという事実は確かだ。

（返せ赤井ソラ！ それは俺の…!）

（ふふ、万年浪人。一つ忠告してあげるわ。わたしなら、ずっと隣の席を見る、という行動は取らないわね…!）

——! 試験監督が浪人を不審そうな目で見ている。どうやらさっきの時間から目をつけられていたようだ。

（け、けど、問題用紙がなかったらこれ以上の解答は）

（あら、あるじゃないの。よく見なさいよ）

あつた。確かにあつた。炎上している、それ、が——赤井ソラがすり替えた、それ、が。

「ほげええええええええええええええええええええええ!」

問題用紙はバチバチという音を立てて燃えていた。試験は一旦ストップし、浪人は嚴重注意を受ける羽目になった。

が入室してきた。

試験監督は叫びつづける彼を黙らせ、指定された席に連れて行こうとした。

「異議ありッ！」

そこで叫んだ者がある——赤井ソラだった。

「ど、どうかしたのかい？ えっ、何だね君その恰好は!？」
今の今まで試験監督はソラが全裸であることに気づいていなかったらしい。目を白黒させている。

「全裸で受験してはならないという規則はごさいませんか……いえ、試験監督！ わたしが言いたいのはそういうことではないんです！ その肉、神聖な試験を遅刻によって汚した重罪人ではありませんか！ 今すぐ打ち首に処すべきです！ 少なくとも江戸時代なら……！」

「い、今は平成ですから。お、落ち着いて……そもそもどうして裸なん、」

「センター試験は神聖なる儀式！ わたしは神様に仕える巫女のような存在ですから、当然でしょう!？」

「え……あ、はい……」

ソラの勢いに押され、試験監督は思わずうなずいてしま

った。誰だつて半狂乱の裸美少女には弱くなるものだ。

「で、話を戻しますけどねッ！ この万年浪人を退室させてください！ 彼は遅刻したんですよ？ 試験注意でも遅刻は厳禁と……」

「おいおい、待ってくれよ」

そこではじめて、今の今まで黙っていた万年浪人が声を上げた——イケメンでもなくせに、無駄に恰好をつけている。浪人以外の人間を思わずイラッとさせるには十分だった。ある意味、これも才能かもしれない。

「……もしかして、知らないのかなあ、赤井さんは？」

「な、なによ……」

しばらくの芝居がかった溜めののち、浪人はおもむろに必殺の一言を吐いた。

「試験開始後二十分までは、入室可能なんだよッ！」

「な、なんですってー!？」

赤井ソラはがくり、と膝を折ったのち、無言で自分の席に戻っていった。

——勝ったッ！ 彼は、確信した瞬間、肩を叩かれた。

「君、試験時間はあと五十分しかないよ？」

「う、うわああああああああああああああ!?」

一時間目の試験はとどこおりなく終了した。登場以来叫んでばかりの万年浪人であったが、このときの叫びが一番絶望しきっていたと言えよう。

試験時間は問題用紙回収を含め、二教科選択の場合、百三十分しかない。その百三十分のうち八十分を茶番に費やしてしまつたとすれば、調子に乗ってしまった自分を責める以外できない。そして赤井ソラはというと、全てのマークを綺麗に埋め、余裕の表情で数学の参考書を開いていた。(ムカつく……ムカつくぜ! 俺はこの女のせいでまた浪人だ! (※二十二回目))

「あら、万年浪人。さすがに諦めがついたかしら？」

なぜか勝ち誇つた表情でソラが見下してきた。床に頭を打ちつけていた浪人は、ぎろりと彼女を睨み返す。

「おまえごときが東大に受かるうだなんて、高望みもいい加減にしなさい」

「……なんだと……」

「東大に合格するのはこのわたし、赤井ソラただ一人よ。邪魔する奴らは全て葬り去ってきた……何人も何人も何人

も何人も何人も何人も何人も何人も何人も何人も何人も」

ソラは爪の隙間に仕込んだ、あの特殊な毒入りの芯を見せつけてきた。偏差値六十五以下の人間を葬り去ってきた必殺兵器だ。彼女は東大を愛していた。他の誰よりも愛していた。だから彼女自身が足切りマシンと化して、勘違いしたアホな受験生から東大ブランドを守ってきたのだ。

「俺だって東大に受かってやる!」

「へえ? ずつとおまえを観察していたけれど、全然できなかつたわよ? サルのほうがまだマシンね」

「あんなの俺の実力じゃあない!」

「落ちる奴らは皆そう言うわ……これが俺の実力じゃない、本気を出せば違うんだ、って」

「ちちちち違う! 本当に本気を出せば受かるんだよ!」

あまりにも核心をついた発言に、浪人は動揺を隠せなかつた。

「へえ……分かつた。次の時間からはわたし、おまえに手出ししないことにする。それで結果を出せたらおまえの勝ちということにしてあげるわ。どうせこれまでの結果からして東大に受かる確率はゼロなんだし……これぐらいのお

遊びならつきあつてあげてもいいわよ？」

「その言葉……後悔するなよ!？」

★二時間目【数学①】十三時～十四時

(うおおおおおおおッ！)

浪人にとつて、数学はけつして得意教科ではない。一応彼は理系だったが、得意教科はどちらかというと文系(社会、国語)に偏っていた。

(見える……見えるぞ、答えが！)

赤井ソラへの憤りが基準値を超えた(※ただちに人体に影響があるとはいえない)のだろう。エネルギーが、彼を駆け巡っていた。怒りはときとして人の隠れた能力を目覚めさせる。普段ならばかなり手間取っているはずの問題すら、一瞬にして答えがわかる状態になっていた。

さすが二十二年連続でセンター試験を受けつづけてきただけのことはある。

(……………ふう)

すさまじいスピードで解いたおかげで、二十分もの時間を残して終わることができた。

(この教室内で確実に俺が最速……なんとか意地は見せられたようだな！)

そんな浪人にソラ以外の誰かが憎しみのこもった視線を送っていることに、彼は最後まで気づかぬままであった。

★三時間目【数学②】十四時五十分～十五時五十分

(——!?)

浪人が異変に気づいたのは、試験開始直後だった。

なんと、筆記用具全てが粉碎されていたのだ。とても使える状況ではない。ジャケツトに入れておいた予備の鉛筆すら、バラバラにされていた。

(赤井ソラの仕業か!?)

——いや、さっき彼女はもう手を出さないと誓った。彼女の性格からして、自分から言い出した提案を自分で反故にするということは考えにくい。だとすれば……。

(第三の人物が居るといふことか?)

(ああ、もう気づかれちゃったか)

(!?) こいつも、直接俺の脳内に……)

浪人の予測は当たっていた。

浪人の受験を邪魔する第三の人物……この教室内に確かに存在している。

浪人は試験監督に見つからないよう、感覚を極限にまで研ぎ澄ませて周囲の様子を探った——居る。赤井ソラ以外にも、異常なオーラを放っている奴が……居る。

——万年浪人の、すぐ前の席に。

（ごめんね？ 君の筆記用具を一つ一つ丹念に粉碎しちやつて）

学生服を着た少年だ。さっきの浪人ほどではないが、相当のスピードで問題を解いている。

（な、なんでこんな卑劣なマネを!!）

（んん、聞こえないなあ、声を上げてみたらどうかかな？）

（くっ……）

声を上げることができない。これまで（ほとんど赤井ソラの妨害のせいだったが）の所業により、万年浪人は試験監督に完全にマークされていた。これ以上騒げば……例年通り、カンニング容疑で強制退室処分確定だ。

（お前……何者だ？）

（……）

カツ！ 周りの受験生にプレッシャーを与えるためだろ——大げさな音を立てて、少年は鉛筆を置いた。まだ試験開始から二十分しか経過していない。

（僕はヒトシ。東大にもつとも^{レベル}き者。東大に合格するのはこの僕。赤井さんにちよつと認められたくらいで、僕を倒すことは不可能だよ）

……な、何を言ってるんだこいつ。浪人は混乱していた。同時に憤りを憶えていた。人の筆記用具を粉碎しておいて、何を格好つけてるんだこいつは！

だが筆記用具が粉碎された以上、解答を開始することすらできないのが現実だった。腹立たしいことに、ヒトシはさつきからクスクス笑っている。

このまま諦めるしかないのだろうか。

一日目の教科が爆死してしまった以上、浪人が東大に受かる可能性がゼロということはすでに確定していた。それなのに、どうしてヒトシは浪人を潰しにかかってきたのだろうか。

（僕が最速でありつづけるためさ）

浪人の思考を読んだかのように、ヒトシが答えた。

(東大に^{ヒトシ}き者として、僕より早く問題を解き終わる奴の存在を認めるわけにはいかないんだよ……！)

なんたる理屈。なんたる自分勝手！

浪人の怒りに、さらに火がついた。こんな奴が東大に受かるのか。それで良いのか——良いわけがないッ！

——少なくとも、俺は許さない。

決意とともに浪人は問題用紙を開いた。

(馬鹿が！ 筆記用具がないんだから無意味……!?)

次の瞬間、ヒトシは驚愕した。

背中に熱いものがかかっている。これは……。

(!? まさか、な)

浪人が左手首から大量の血を噴出させていた。

昨日赤井ソラから食らった芯は、未だ右手の甲に刺さったままだった。そのまま放置しておいたのが功を奏した。

浪人は今、その固い芯を利用して左手首を切り刻んだのだ。

血液の噴出がひと段落したところで、浪人は静かに解答を開始した——すなわち、血でマークシートを塗りつぶし始めたのである。

(……………くそッ)

ヒトシは考える——もし自分が筆記用具を粉碎されていたら、浪人と同じ行動を取っていたらどう——だが、それを認めれば、浪人もまた東大に^{ヒトシ}き者だと認めることになる。認めたくない、認めたくない……！

「……………くっ！」

紅に染まる視界の中、ただただ浪人は目の前のマークシートを塗りつぶしつづけた。試験終了まであと一分。彼は雄叫びを上げた。

「うおおおおおおおおーッ！」

「……………負けたわ(よ)。浪人(さん)」

試験終了後、赤井ソラのみならずヒトシも浪人に握手を求めてきた。浪人の心からは、不思議と二人に対する憤りが失せていた。いくら妨害をされたとはいっても、二日間、全力で戦った相手だ。自分の全てをぶつけた戦いだ。悔いは、なかった。

「君たちも、一度目にしてはなかなかの力だったよ」

すがすがしい気分の浪人は、次の瞬間、驚愕することになる——ヒトシの校章……これは……。

「LSD学園の……中学一年生!？」

「はい、そうです！ 僕はLSD学園中等部一年三組に属しています。僕だけじゃなくて、赤井さんも……」

「ええ、そうよ。LSD学園では三学期期末試験をセンター試験受験に振り替えているの。今から実戦力をつけておけば、いざ本番というときに役立つから」

「……………」

浪人は圧倒されてしまった。彼を散々に苦しめた二人は、まだ中学一年生だったのだ。もちろん、LSD学園の名前は知っている。東大合格実績圧倒的ナンバーワンの、超進学校だ。東大を目指す者なら、誰でも知っている。

現在中学一年生ということは、彼らが現役としてセンター試験に臨むのはあと五年後——浪人にとっては二十七回目のセンター試験に相当する。

「……じゃ、また来年」

——上には、上が居る。

センター試験とは、かくも恐ろしい化物が集う場所だったのか。赤井ソラは神聖なる儀式であると言っていた。そうかもしれない。人の（社会的な）生き死にが決まる、重

要な通過儀礼なのだから。

浪人は今後彼らに会った場合のことを考えて、ますます勉学に励むことを決意した。

彼の桜が咲く日も、遠くないかもしれない。

(終)

※この物語中に出てくる「東大」は「祭東大学」の略称であり、実在する「東京大学」とは何の関連性もありません。